



俳諧
新送年浪發句集四編
札³

5
5612
3



門 八 五
號 5612
卷 3

半日庵芳律編

俳諧新選年浪發句集四編 二冊
乾坤

東京香同社藏



年浪集第四編序

あゝ祖傳の古人のまゝなる法を
求めた古人は求むる處をわがわが
南の大海の峯を越法入るるが如く
東の門の西示る處を越道のはらへ
種々々々々々々々々々々々々々々々



去る年々友小宮尾芳律氏と後進との
不易をこゝろを以て流行よからせしむる

向作の一冊あり先年新造年痕
てゝ款類集を編纂せし終りお終に
度々もまたお終りては同類を求むる
数書ある多しありあつたは海を
治むるにやうも四海の上未だ完備
せしむるに難しの変化詞彙の并置を
至る所を採り海水のいろも書きし
一冊もあつたは集を編纂せし終りて

古人書お終りて古人の求むる書を
とらへんや海に風流をたしめし
自然妙境あり流り終りて
書易くも不易の美あり佳境あり
中かたの業ありては海にあり
席をたしめし終りては海にあり
その業ありては海にあり
及ぶの海にありては海にあり

あはるるにきく食ふあはるるを焚燔し
書くしやあはる

明治二十七年七月

青月園吟風後

北林藤延書 魁 印

凡例

- 本集編纂の趣意を初篇二篇三篇と逐次記載したれども更に掲げに其巻々を看る人自ら了解すべし
- 本集を編むを重るふはるる句題の至難に相ひたり故に選む所の発句悉く考逸としるるを以て只格と叶ひたるを採りしもあり
- 本集不裁の所の連句敢て精選せしむるは惟發句の刻成に臨了適宜追加ののみ素より大方に批判を豫期する所あり可し

明治甲午年 初秋

槐野主人誌

○上の巻

新年	一初明	二注連飾	三福藁	四喰積	五
田作	五破魔弓	五羽子板	六羽子	六人日	七
初卯	八淡香	九水好	十春色	土風光	土
畑歩	土永日	三紀元節	古但繁	五引鶴	五
秋菜	去穢	去穢	去穢	去穢	去穢
田螺	去穢	去穢	去穢	去穢	去穢
春惜	世〇	新樹	世餘花	世出代	世
病葉	世〇	世〇	世〇	世〇	世〇
老當	世〇	世〇	世〇	世〇	世〇
夏羽織	世〇	世〇	世〇	世〇	世〇
夏山	世〇	世〇	世〇	世〇	世〇

任言

早乙女	共田草取	共夕取	共蓮	甲石草	里
梧子	里过か花	里冥詣	里冥詣	里冥詣	里
船下	里纏	里振舞水	里葛水	里煮梅	里
牛皮脱	里	連句秋仙二巻			

○下の巻

来秋	一初嵐	二散柳	三稻の花	五衝突入	六
施餓鬼	六墓糸	七蓮飯	八桔梗	九蒟蒻	九
紫苑	十花野	土三草日	土秋雨	土秋雪	土
鶉	土放生會	土牛蒡	土煮菘	土菘姑	土
奇月鏡	土宵刻	土夕夕	土露	土燕飯	土
山雀	土さく	土葉橋	土梨子	土荔枝	土
花果	土色	土秋述懐	土行秋	土〇	土

目錄

神の旅	辛初冬	世初春	世冬	世三枯菊	世四
冬構	世天長節	世芭蕉忌	世子祭	世西の市	世九
袴着	世冠之世	甲衾	里湯築	里官車	里三
根	里粟	里冬至	里早咲	里新葉	里八
鯛味噌	里暖鳥	里雑冬	里年忘	辛岡見	至
除夜	至	連句祝仙二卷			

新選年浪發句集四編

上の巻

新年

中日庵芳律選
芙蓉庵文禮校
一具庵尋香閱

新年の暮 起もや松の声 東京 幹雄
 新年の活代に 花の匂い 下総 和親
 新しき年やまきも 上総 白水
 若菜のや新年 貞の小田の轡 常陸 連
 新年の奇も 雪の記 飾り物 東 東曉
 新年や 花の記 あり 儚し 伊勢 花

新年の衣櫛や素袍床檣羽後 啼風
 新年の太空よりおもひより、
 新年の煙りきり家毎に、
 新年や若ききて来る客斗り、
 活れる世や新年に言、新、
 名もたはる管新年の光りうま、越後
 新年や都大路を松と也、上毛
 言ふのら新年を多々山、
 新年やかた山家も知らけ、
 新年や抱ふ心、きこもれ、
 寛きや新年少りの葉の心花、相模
 新年や軽きよ、向ふ多の舌、
 青園、
 魯石、
 琴山、
 吟雨、
 玉桂、
 空海、
 本鳳、
 真虎、
 淇山、
 帝崎、
 風

新年や常も知らる、親子中、
 第のたや新年よりの人田入、
 新年の先より、立たる、あつらひ、
 新年やいよ、吉江象庵、
 初明
 初明の岩戸神樂や、初明、上毛 歳琴
 初明の客の舞歌を照らす、
 初明や多ふ、物をな、
 先雪の窓より、さき、
 初明、陸中 友山
 眼に、物皆、
 松の香は、立初め、初明、羽後 素泉
 浦尾女、
 桐司、
 伊豫、
 茅、
 緯、
 窓、
 梅、
 白、
 山、
 我、
 山、
 松、
 泉

何らと云く 移りゆく 初明り
 見えりける二見の七五三や 初明り
 初明り 言の浮山もほろく
 神の灯也上ももさきや 初明り
 鶴飼の紺箱取之や 初明り
 起る音の勇心初明り
 山里や去年のさくら 初明り
 蓮戸も初明り 初明り
 船を常の馴れあり 初明り
 所の炭と雪に多るや 初明り
 初明り さきや 深立ち 海と山
 とらぬやよき 初明り 吹く 松の風

豊後 豊前 豊後 豊前 豊後 豊前 豊後 豊前
 連 東 連 東 連 東 連 東
 暁 風 暁 風 暁 風 暁 風

初明り 常きく 山
 眠い眼も 初明り
 初明り 静に 消 星の 氣
 船に 初明り 港
 森の間 梅先白 初明り
 注連飾
 新建のひと 注連の 葉
 金屏に 紙 注連飾
 歌を 明 地 注連飾
 注連飾 桑原 廣
 自ら 吹く 神 注連飾
 町 注連飾 上 毛 羊

羽後 月 為 勅 初
 東京 南 白 人
 芳 緯

陽れ家のかたれ家冬に注連飾 上毛 近山
 能やうなひと筋町や注連飾 上毛 都々美
 物りりきたかきより注連飾 上毛 歴山
 山の井も海む人ありて注連飾 上毛 嶽琴
 かきありし神代のゆか注連飾 相模 閑美
 ゆみとき家の楯戸を色うさる 上毛 西多
 湫瀧の多きと暖よ注連飾 上毛 青圃
 葉くれけ代より注連飾 出雲 松虬
 注連飾しそ能やうを焼新うを 出雲 舞絲
 共多家根に能き初合や注連飾 上毛 芳拜
 飾り焼く注連繩を神の楠 上毛 文禮

福藁

福藁より庭のまきも陽れり 相模 月待
 福藁やまきと白ひのまき新 上毛 月海
 福藁の香より曇りけき新 上毛 都毒
 うらわらや粗末よふまね 上毛 左公
 福藁の寂目にならやひ 上毛 素白
 福藁や明くきりて庭の面 上毛 井月
 物くくくやんか法 上毛 睡痴
 福藁より 上毛 一徹
 福藁や香より上り色 上毛 歴山
 福藁や常より上りの南 上毛 赤峰

田作の動々やうきうきと
 田作やうきと深き毛脂の敷
 田作の魚とあまのねあまのうき
 田作とあまのうきと
 田作やうきとあまのうきと
 田作やうきとあまのうきと
 田作やうきとあまのうきと
 田作やうきとあまのうきと

新 相模 一
 上毛 一
 吟 一
 琴 一
 向 一
 東 一
 芳 一
 律 一

可 山
 一 羊
 逸 水
 友 山
 月 待
 吉 急
 芳 律

可 山
 一 羊
 逸 水
 友 山
 月 待
 吉 急
 芳 律

可 山
 一 羊
 逸 水
 友 山
 月 待
 吉 急
 芳 律

破魔弓

はまらや坊のこの子か勇ま
 破弓やうきと服紗に強き箔
 とほらや飾りの中にあまのうき
 破弓の眼はつらや一矢真
 君や代や破弓の弓矢も飾り拍
 破弓や等閑あらぬ御
 はまらや坊のこの子か勇ま
 破弓やうきと服紗に強き箔
 とほらや飾りの中にあまのうき
 破弓の眼はつらや一矢真
 君や代や破弓の弓矢も飾り拍
 破弓や等閑あらぬ御
 はまらや坊のこの子か勇ま

上毛 一
 上毛 一
 上毛 一
 上毛 一

可 山
 一 羊
 逸 水
 友 山
 月 待
 吉 急
 芳 律

可 山
 一 羊
 逸 水
 友 山
 月 待
 吉 急
 芳 律

可 山
 一 羊
 逸 水
 友 山
 月 待
 吉 急
 芳 律

羽子板

羽子板て招きあそぶり花ひ連 羽後 法
 舌をくちり羽子板うきすす疾り 上毛 吟
 羽子板や押巻くちりある紀世の進み 上毛 梧
 羽子板や念入てくる 上毛 表 上毛 葉
 羽子板や押巻くちり結ら子め枕元 上毛 松
 羽子板の上もあそぶ 上毛 妻 上毛 芳
 羽子板や果々中能く井重祢 上毛 文
 羽子 上毛 一
 実ものから来る之羽子の呼びは 上毛 月
 高れ羽子の飛入る破れ障子 上毛 貞
 せり羽子板清くせれる笑ひ 上毛 鳥

好保いまても往きん羽子の友 友山
 追羽子ま塚の声ら 上毛 塚 上毛 祥
 ちりり 上毛 や実憎さうに風の羽子 上毛 常 上毛 昇
 家根の羽子風かゆ 上毛 て美子 上毛 東 上毛 暁
 せり羽子や風にせれても囃される 上毛 拈 上毛 華
 羽子や人交せもせん羽子の音 上毛 三 上毛 歩
 羽子実や足せぬ敷を 上毛 羊 上毛 窓
 蝶 上毛 一 上毛 のせり羽子 上毛 実 上毛 文
 新風やわらう 上毛 房 上毛 一 上毛 山
 せり羽子も幾群あらん 上毛 廣 上毛 小 上毛 路
 人 上毛 日 上毛 塗 上毛 文 上毛 箱
 人の日 上毛 塗 上毛 文 上毛 箱 上毛 唯 上毛 風

人の日や人の日多くと 通る 町 羽後 以
 鈴孫して人共日修程へらしり 、 蘭 雨
 人の日や日かな 一とん 容相を 楮 風
 人共りよ着て出は 住立 羽織り 赤 峰
 人の日や七色 ぬね するより 巳の業 友 山
 人共日や朝 かなり 人の 多き 信濃 盛 友
 人の日や 静けし 瘧の 穢あり 上毛 晴 月
 人共りや 野を 眺多き あり 我 月
 海士の 子も 人の 日より の 抱ひ 我 月
 人の日や ぬ湯 立ち たる 仁 在 我 月
 神垣 かな 人の 口ら けき 鈴孫 我 月
 人の日や あり 焚られ ぬ 古 曆 梅 白

人の日や 野の 香共 梅 著の 光 相模 其
 人共日や 夢より 抱き たる 神馬 あり 法 味
 人の日や 山の 眠り あり 多き 晴 魯 石
 人共日や ねも 光り 添ふ 日 一 和
 人の日や 又 あり たる 系 心 晚 翠
 人共りや 著る 多き 傳 唱 官の 終 黙 文
 人の日や 世 あり たる 人の 多き 狂 狂 園
 人共りや あり たる 人の 多き あり 狂 狂
 人の日や 抱ひ 上 多き 唐の 音 吾 意
 人共りや あり たる 人の 多き あり 疾 意
 人の日や 起る 多き あり 層の 障 尚 雲
 人共りや 成て あり たる 心 あり 南 畝

人の日如人子能りし野道は
人の日如常より多き庵の客

初卯

寄る家の多し初卯の房り道
船空を巻いて出てゆくも知れ
化糖したるをきく初卯哉
人の皆初卯し物買ふ初卯は
舟の本を極くももつ初卯な
隣より暦より来り初卯の奈
汐風の未だ牙には多し初卯の日
船の着飾りて来り初卯の
海に傳はるる初卯の人海

上毛 信濃

寸 芳 唯 月 以 士 如 告 曲 梶
律 芳 風 静 孝 行 鳳 窓 年 朧 司

婿しそそ名も佳よしの初卯哉
能い日も日初卯し初卯の日
とるはも初卯初卯の房り道

横濱 東京

其 其 芳 律 獨 尤

淡きもの何とまらり初卯の
何とまらり初卯の
地よりぬるる初卯の朧色は
淡き初卯のまらりひと風情
あけを初卯の初卯の性記
何とまらり山ハ珠のまらり
淡雪の中も初卯の初卯の家
夢なり初卯の初卯の野菜も如

美濃

閑 西 閑 芳 其 其 貫 吳 柳 淡 閑 西 閑
茶 笋 美 糸 絲 山 琴

清き水のあはれきや 花の松
水は清く 深雪あわと滑り
深雪も是悟とせしや 花の松
深雪も 葉を煮て 湯に 松
あはれきや 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松

羽希

芳 亀 祥 奇 清 素 轉 友 東 五 松 梅
律 鰐 松 川 泉 子 山 曉 山 少 白

梅

清き水のあはれきや 花の松
水は清く 深雪あわと滑り
深雪も是悟とせしや 花の松
深雪も 葉を煮て 湯に 松
あはれきや 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松
深雪も 湯も 湯に 松

水ぬるむ

鯉のうへ 泡のうへきよ 水ぬるむ
水温む川中人 新様ゆいけ
流れよる 田口の泡も 水ぬるむ
緋の糸の意 顔も 水ぬるむ
山ひらき 水ぬるむ 水ぬるむ
流れよる 水ぬるむ 山の水
水ぬるむ 夜行も 月も 溜田川
新のうへきよ 水ぬるむ 水ぬるむ
山新のうへきよ 水ぬるむ 水ぬるむ
池子魚 流る 水ぬるむ 水ぬるむ

羽希

文 禮
晚 雲 吳 左 崑 歷 士 行 山 琴
一 曉 月 珠 風

梅

舞なき新中門田の水のぬるむ音
那信来るるに於ぬるむ茶水これ
五橋の喜子さすりやえぬるむ
流れに不残くも水のぬるむ
昇る日にぬるむ田水の煙り
苔葉も巻葉ほられて水ぬるむ
ぬるむ心もあけりには立ぬ 際
夏も年一なり水もさくく流れば

春色

野も度 流る水も春の色
新しき暖草やまもとも水色
いと命の舞もあけり春の色

横濱

一 香 栗川 梧風 周茶 浦尾 鶺鴒 文禮 芳 拜 月 節 向 菜 本 風

春う人されい事もはるのいふ
葉の戸や門うらまけり春の色
重箱の中もあけり春の色
湧出る水もあけり春の色
筑波根や雪をぬれぬ春の色
流るも楢の葉あり春の色
竹たのむさねも遠くは春の色
春せしむる汐もあけり春の色
加茂川や流る水もあけり春の色
峰をまてあけり春の色
春山や春心うらまけり春の色
一日く月立ちぬ山は春の色

信濃

友 山 蓬 残 如 楓 如 風 雙 松 吟 雨 半 急 吳 雪 晚 翠 魯 石 松 地 左

一連下り善の色多れ山と多
新くも何も候る也留田の善の色

風光

海てら〜風おもありに光るり
風光る中や堤の人通る
きら〜と風の光るや波か〜ら
岩を打つ浪もさうらや軽舟風
風光る中や公帆の舟遊む
昇るふふ風の光る也留田川
普清塔の風い〜う〜う 鈍屑
風光る海へあけ〜やき眼鏡
細く〜風も光る也留田の影

上法

可 芳 唯 素 落 逸 素 琴 巖
芳 律 風 泉 山 昇 水 行 芳 琴

風光るい〜う〜う〜う 軽舟浮
所節や浪舞のあ〜と海 風光る
色多き〜 樹の梢中 風い〜る
房にた〜るのゆ〜と中 風光る
風光る海へ〜経〜や公帆舟帆
風い〜るも水層も 遠通れ
野趣〜ゆ〜神馬の幣や 風光る
細 舟
体り〜るも舟〜 細舟〜う〜う〜う
軽舟〜と目に舟初ると〜け〜れ
細舟や仔細あ〜る〜ら麻山〜て
は〜と舟や小流 越の〜も〜

上法

以 松 月 其 楯 半 芳 唯 素 真
文 圮 結 獨 栖 憲 律 風 風 泉 身

上法

行ふけて馬見のりや門とて
柳や道と探ゆり石瓦
おてら山畑産くこえり
畑や降る好く笠も入る日如
ひのぬい月うして歩の畠と申
山倉戸歩てま形ゆの畑と記
畑や人こえりけふらぬ徳
歩の博も靴のこころはけり
おとまりついでぬき歩の畠と申
畑やといひ日向舎小窓と申
春の燕にうくるまほ歩の畠と申
まを向うて歩のりて居る畑

寸 友 淵 逸 喜 洲 齡 可 養 吉 芳 文
芳 山 梅 水 雲 麩 龜 山 柳 憲 律 禮

永日

ゆつたりととて日の永一七六
永きりと書一上とや 居る
厚くしり鯉に誌と書。日永これ
永きりや海とくくくくく旅
泊り鹿の市とてよゆる日永と申
働工知るや日永の初一とみ
松島も堤をまをたけり永うな
永江日や人約旅のつとて馬
日永一殊更居るいとけ
永きりや指重りまも旅居物
つとてまも指一や伴響へ初書

陰 蘭 全 楮 向 本 真 以 里 如
風 雨 風 菜 鳳 牙 存 生 莠 風

水江の清く合さや 篇として
 水きりりや世の風呂人きぬら
 水きりりや白くさきくく 人の心
 篇として 篇として 水きりり
 羅漢寺の佛 篇として 水きりり
 今日も又富士の極なり 水きりり
 隆平のいさふきりり 水きりり
 水きりり今 篇として 水きりり
 猫の子は 篇として 水きりり
 水きりり 篇として 水きりり
 水きりり 篇として 水きりり

友山 茶山 春水 一 素白 近山 吳嶽 東曉
 友山 茶山 春水 一 素白 近山 吳嶽 東曉

水江の清く合さや 篇として
 水きりりや世の風呂人きぬら
 水きりりや白くさきくく 人の心
 篇として 篇として 水きりり
 羅漢寺の佛 篇として 水きりり
 今日も又富士の極なり 水きりり
 隆平のいさふきりり 水きりり
 水きりり今 篇として 水きりり
 猫の子は 篇として 水きりり
 水きりり 篇として 水きりり
 水きりり 篇として 水きりり

可山 青園 棋園 左 梧 晚 吳 約 眠 一 尚
 可山 青園 棋園 左 梧 晚 吳 約 眠 一 尚

分限者の持山 此の日永く申

紀元節

多も亦後伸 神のりや 紀元節
河のりや 國の 業や 紀元節
禮原の礎かた 紀元節
うれーさや 紀元節 念の 銘あらけ
か記うらまき 所代の けを 知る け
天津のめ けと けきり けの 節 會哉
君の代や 紀元を けく 旭の 光り
阿らたき けの 日 如や 紀元 業
さうぬたき 慕ふ 昔を 紀元節

涅槃

芳 律
歲 年
吳 重
青 圃
浦 尾 甘
歳 琴
玉 桂
洲 巖
向 景
芳 律

大徳に眼もさきさくや 涅槃像
峯さうら 拝み 申 ね ねん像
大寺もせもき 涅槃の 日 如うら
旅あれハ 難進もせん ねん像
涅槃會や 誓の 洞の 殊像も ね
ねん像や 多鞋の 作れ 立 拝み
善生のの 玉子も たら 涅槃の 日
涅槃會や 常より 美き 堂に 燈
是れや 人ふ 淋 ねん像
涅槃會や 花を 持て ねん像
尊きと 言言 傳 ねん像

横溪

唯 風
蘭 雨
為 勅
友 山
梧 栖
淇 園
以 文
香 山
琴 芳
素 白
芳 律

引 翰

五三

引雀戸浦をりかゝるる日江
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂

井 月 眠 露 文 禮 芳 拜 歴 山 都 美 白 水 素 柳 一 和 其 山 松 其 山 松 其 山

引雀もあふ一葉のほろや言わさう
引雀も鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より
雀引くあふ老るや磯の砂
鶴の引かゝるる途を首途より

井 月 眠 露 文 禮 芳 拜 歴 山 都 美 白 水 素 柳 一 和 其 山 松 其 山 松 其 山

三六

三六

瘠し地より肥えよひしき松葉哉
淋瀝の由りを伸るすききふ
松苗おなうふ伸勝の松葉は
洒落る水洒むは居の松葉は
矢槍ひの踏ありしは松葉哉
蔕物し伸勝の畑の松葉は
松葉まほ伸れ珠の葉の度
蛇ちうしして水や松葉をともれ馬
泣きしと濡入てまき松葉は
瘦細りいらぬ海松葉は
程もまき松葉はまのぬお筆畑

松葉

風 東 連 一 洪 南 吟 白 笠 芳 文
奇 曉 香 山 臥 人 枝 律 禮

伸る末は標も松のやまら州
花曇りて沖へ上りしは松葉
蔕より似も大きき松葉は
供連て人の標もくきくら子
野まらても延る命や櫻草
よまら松の葉も誰ももせら松葉
まらら松葉も野面やまら松葉
庭築も末のりす葉の根分は
縄張てあるや根分は葉細
釣糸の人に知らせり菊根分
しらまら世早けれとまら根分

松根分

告 差 洪 素 才 尚 芳 吟 向 聽 本
意 難 山 白 芳 雲 律 風 泉 風

分てきてとけてきつらうの葉の苗
 あすからふ知れぬもあらん葉根分
 人多くわけた主人の菊やふ
 門さして一日葉の根とけうを
 独りしてを慰む老や葉の苗
 芭の修雨にちたせらつきくせ苗
 葉は根とけ入院披露にあくれ危
 れも傳も添て苦うや根分菊
 根分して樂み独りぬ葉 畠
 曇る日お嬌しうらうの菊根分
 日にとももさすや葉の根分して
 儂ある雨さうの菊の根とけお

友山 如風 一歴 所巖 我琴 松机 一葉 柳和 遠強 梧栖

常陸

世世

約束の順とけけらうきくの苗
 根分も葉の脚や 新葉お陽
 根とけした葉たまたま月ひは
 葉の根とけやうもあらうなる
 苦い人のあらう命は 根分葉
 不のまもつるお海やうく 根分お

告窓 半窓 寸芳 文禮 芳拜 帯泉 月静 素峰 素泉 秀川 聽泉

明後

上六

集宮のむと一編の中 彼岸の
老蓮はあつれ事始む ふうんの子
思ふより 雲は旅する 彼岸哉
道連も誘ひて 岸に坐す 彼岸の
地はあつて 鳴や 彼岸の夕陽
踏む して 早えのうき 彼岸の
烟通る人も とうと 好 彼岸の
ゆき 寺より 祀の音する 彼岸の
船のハきとも 彼岸 日和 一
るも あり 毛 芽を ぶいて 知る 彼岸の
念佛 して 彼岸 岸の ひうん
るの 戸には 菜の うき 彼岸哉

一 東 吟 歴 琴 一 多 涉 逸 杏 白 月
名 曉 雨 山 芳 淡 新 巖 水 急 水 涉

世

義寺の掃除 して あり 彼岸の
唐の家の 菜汁 菜飯も ふうん
夏まきの 中を して 彼岸 岸の
夜の 幽暗も 已 遊 には 彼岸の
持袖の 袴も して 彼岸 岸の
穿ぬ人の 心は 花の まくら 袖
敷の ち 着く 生 船 中 候 とい
それ 候 皆 穿た くり 好 候 鯛
岸の子 知らぬ 名 なる 櫻 とい
初られ ても 時の 候 くり くら 鯛

櫻 鯛

田 螺

歌 月 可 南 芳 吳 貫 無 眠 芳
毎 待 山 顔 律 宵 山 齋 律

世

葛飾に泊てき、——田螺は
鳴もたきけ、鳴たき田螺は
拾うたる田螺、きく日ち、水
も、朝のき、——田螺哉
庭の本に、移のお、す太仁之が
元、強、す田螺、す、輪の、知、も、なる
水、も、す、す、月の、あ、き、す、啼、田、は、し
月、あ、て、星、の、ゆ、る、——田螺
音、を、付、た、夜、も、つ、と、す、田螺、は
与、産、く、さ、ら、か、り、る、——田螺、は
動、と、う、く、音、を、と、と、て、る、田螺、は
水、口、一、後、き、り、——田螺、は、子

一 近 晴 歴 湛 一 半 杏 蘭 文 落 嗟
山 山 月 山 園 和 窓 窓 雨 通 山 凡

大村の夜の、寂、き、啼、く、田螺、は、
新風、吹、鳴、也、田螺、の、遠、い、ち、う、ら

孕鹿

産みさうそ、今、か、ま、も、も、鹿、の、腹
村、川、を、廻、——に、き、う、そ、と、ら、み、麻
は、日、の、知、も、あ、ら、き、ん、は、ら、い、し、あ
情、も、く、人、も、あ、も、く、ん、は、ら、美、鹿
孕、も、の、鳴、く、は、き、ら、く、——あ、も、く、ら、り
室、も、の、傳、音、を、と、と、て、う、ら、や、孕、麻
あ、ん、記、——山、の、廻、り、と、ら、み、鹿
孕、鹿、の、あ、る、山、も、も、く、ら、り、り、り
鳴、く、戸、を、待、つ、ま、あ、り、や、孕、ま、あ

森 青 尚 風 清 友 為 聽 嗟 文 芳
線 圃 屯 秀 泉 山 勅 泉 凡 禮 律

わらうよまきりけゆやもらうと麻
床あましくもあせなほらみ鹿
草あらみし休す様を原か
石かの可き句りりりらみ麻

呼子音

甘き味やうたおのや呼子音
山響や眼のまじれハ呼子音
見返れハ一人きりうう子音
旅僧の杖と免り呼子鳥
松風の針と音はしと梅と音
淋しきまゆ方とあり呼子音
山住の袂とあまやうと音

望 玉 睡 芳 月 嘉 以 如 洲 素 嶽
山 桂 痴 拜 峰 壽 楓 梅 白 琴

淋しいとまら針まき 呼子音
老の身うとうちううう呼子鳥
又啼うんやうとまれハうと音

嗔

嗔るもとまれてるぬ 嗔るうら
嗔るや糸のこ場と嗔るおる
嗔るや花をいたる 嬌の事
嗔るや埃りもたけ好まき
嗔るややうの目もまら相り
嗔るや流せぬにまらする
嗔るや僧のまきふゆらから
嗔るや襷帯の老の 庭掃除

武伊奈

文 松 如 雙 兵 五 士 梅 芳 物 莢
禮 机 楓 松 羊 山 行 白 拜 菊

寒空や猫の来たる 雀のト
きやや 福の来たる 田舎裏端
寒噓や 月をくぐり なる煙草盆
きやや けしきなきの あともく
寒空や けしきの 月をくぐり 海山
きやや 廣い産浦に 人少き
寒噓や 輜の命 延より

世代

世代の名強や 菊の 鬚 菊の
世代や 足袋と 酒場
世代や 曆をくぐり 夕に ちみ
世代の 慶者を 顔に 出産を

梅 東 橋 淇 月 欲 芳 唯 蘭 梧 法
院 柵 園 壽 科 風 雨 風 山 東 山

海を 遊く 世代 名強 ころ
世代や 菊の 子ふま 菊の ころ
世代や あま 小まねく 馬の ころ
世代や 噴井 きの 冥加 ころ
出代の 襟の 倉守 戸口 ころ
世代と 知る 小猫の 膝の ころ
世代の 祝の 馬屋 ころ
世代は 立派 杖の ころ
世代は 徳の 鈴起 掃除 好
世代の 舟渡 ころ 重荷 下
世代は 徳の 眼の ころ 神の ころ
世代の 首尾 ころ 英冠 ころ

世代

淇 貞 友 左 鱗 連 東 一 三 井 文 青
山 東 山 一 一 院 分 月 禮 園

出代中言葉少なり物あり
出代中井も名残の氷うみ
お代中様もきき尾を立世し
出代の先筈くくろ膳の数
出代中啼きすのけしあまもく
お代の啼きなりぬ古り利
出代中ぬくろたのも下男

春を惜

春を惜む相もよき新の松
旅人の為め流りや春を惜む
惜すも春ありりる空後磨ゆ
子入りて春を惜むり利休垣

一 閑 美 和
杏 淇 園
杏 憲
芳 律
文 禮
唯 風
貞 彦
茲 山
以 老

惜すも春や旅人も京洛の
春を惜む人の春もくはるれ家
春を惜む春や旅人も老てゆく
春を惜む心市の梅本愛
春を惜み川端も夕べ
春を惜む心や春を惜む心あり春
病重る人も春を惜みゆく
山里や春を惜み念ふ人も多記
垣廻り旅の心や春を惜む心
連ありて芳れぬ旅も心春
掃もせり春を惜む心や春の春
就中春を惜む心や春

朽 泉
素 泉
一 香
奇 川
雙 松
嶽 琴
松 州
多 我
酒 梅
歳 年
素 休
蒼 柳

春を〜むら〜遊〜つ〜た〜舟
旅都合殊更 善を惜みたり
善を〜むら〜つ〜た〜舟
然〜も〜むら〜つ〜た〜舟
燕野ん信 善を惜むや 音の雨

新樹

音の雨を〜むら〜新樹の新音
新音は吟を〜むら〜新樹哉
善を〜むら〜新樹に逢ふ新音
月の如く〜むら〜新樹の
吟〜むら〜新樹日暮りや山の
窓〜むら〜新樹にかゝる小ぬか雨

羽前
上七

可 可 尚 文 芳
山 禮 律
梅 吾 松 潤 淇 芳
瓶 岳 洲 梅 園 律

餘花

餘花を〜むら〜芳野に逢ふ上を
餘花ありと〜むら〜芳野に逢ふ上を
よ〜むら〜芳野に逢ふ上を
山陰や餘花を〜むら〜芳野に逢ふ上を

櫻の葉

樹〜むら〜櫻舟ゆ〜櫻の葉
樹の葉指ひ〜むら〜櫻舟ゆ〜櫻の葉
子〜むら〜櫻舟ゆ〜櫻の葉
閑〜むら〜櫻舟ゆ〜櫻の葉
櫻の葉心茶屋の曲案に白ひたり

月 連 歴 芳 東 梧 身 聽 身 嶺
狗 山 律 曉 柶 川 泉 琴

上五

重身不常も去らぬはくらの美
響くは如てあつ星りおら極之れ
実極に楳の杖多く提う重
響きさらや花の名残に眺えられ
実極や仁王の多結新うき
實はさらやあかれ花の果やこれ
白ふかと唄てもえたり極の實

武原宗

とくら葉やよみ届き一様多から
わくらとの外に葉の一夜の旅
病葉や葉條よりあつたから
とくら葉よと結て花の影を危

病葉

素之玉極 芳文一泊寸文 哉
白歩桂弘 拜禮山翁芳礼 琴

病葉やおき一月りの下ちから
わくらとんまらくもす知り
とくら葉の翫れをき一石を
病葉に不や甘さの初と下
わくら葉や湧水絡みももら
とくらとやわらうと花のぬ
もつと一の葉て病葉を花り
病葉を葉よしてみるや庭男
わくらとや海ほききたるあつと
とくら葉や目とすかりまをから
病葉の落るや風もあつたりふ
わくら葉の力もあら夜明くは

武原宗

洪文淇為本輝特連白月歌以
園礼山勅鳳松子水待瘴雨

病葉のあはれもよらば枝の伸
とくらのつらさの纏とれて落し吹雪は

若竹

若竹の節も数寄角へ運り水
舞いよもいさかきなすし
若竹や日知かきまゝ 影の風
若竹や雪もさきまゝ 人あはら
ふへ毎に伸る力や ちよとて
若竹やぬれ色 深き 影の月
しる竹や日知たきまゝく伸る
若竹の赤きしり伸る 木の音代
毎宿の 雁井あすや 今年竹

東京

磐城
羽衣

南 畝
芳 律

菊 友
一 和
青 圃
松 圀
永 嘯
連 吐
桃 垂
梟 志

若竹の枝よりきくは瑞花の華
若竹やとて赤きしり伸るも毎
破れ寺の多根実橋を今年竹
若竹は親きゆりし 意の月
若竹の赤きしり伸る 木の音代

桐の花

かき候けハ桐も 木の音一と正所
桐の葉も少きしり伸る 桐の葉
五月もさきまゝぬ色や 桐の音
去年の葉もさきまゝぬ色や 桐の音
崩れたる 多根実橋 桐の花
竹の節もさきまゝぬ色や 桐の花

我 琴
所 巖
井 月
琴 芳
芳 拜

月 韻
本 鳳
法 山
友 羊
呉 弘
琴 弘

と移つてくはせ候ちるや桐の匂
今の跡れよんんきりよん
下馬れも古き青き桐の花
経庫さへ通しき桐の花
香糖の管戸に梅香きりよん
桐の香もきりよん
近きれは紅と端ひき桐の匂
ともしよん人な桐の匂れ

蜀葵

蜀葵の花をかりてよん蜀葵の
花も舞もえれよん
寄よ上花も寄もけり蜀葵の

松 遊 法 信 菊 眠 尚 芳 吟 壽 柳
少 珍 泉 園 友 露 電 緯 峰 壺

咲りる日敷の長紅あひれ
咲方てられ細葵白あひ
掛られよん心靡和葛あひ
昇るゆり心信り蜀葵の
ひきりよん咲りよん
いらんも菅の多れあひよん
鈴々や葵えりき眼の片み
伸られ神の心きりあひよん

罌粟の花

罌粟の花をかりてよん罌粟の
花も舞もえれよん
寄よ上花も寄もけり罌粟の

淇 帶 吟 芳 龜 士 井 五 嶽 梧 淇
山 泉 風 拜 鶴 行 月 山 琴 栖 園

晴りゆくちのらんをけりけり
花を掃きけりけりけり
ちれりてそらけりけり
年けりけりけり
けりけりけり
月もけりけり
半橋の車ぬりけり
中御もけりけり
え心もけりけり
聖雲の光りけり
白の雪もけり
持てけりけり

聽泉
素人
友山
琴堂
一減
昭月
雙松
杏窓
望山

藪寺や庭も白も
火のきりけり
聖雲の光りけり
ちれりてそらけり
年けりけり
けりけりけり
月もけりけり
半橋の車ぬりけり
中御もけりけり
え心もけりけり
聖雲の光りけり
白の雪もけり
持てけりけり

月待
魯不
素竹
閑美
青圃
芙蓉
文礼
南歌
芳律
文禮
以者

世

昔や老少のこせぬ声のけり
 うさひすの音に幅おと老のさき
 昔もも老くく日さの晴にみ
 昔の老て寂もく小夜の音
 空にはすの老さうらある葉知れ
 昔もや老少も又老らる
 昔や老てもおる 啼き
 くさひもや老し月日のちう地
 黄鳥の老もなつ日 和歌の浦
 鶯や老きと帰く 水添れ
 昔も老とけりて昔老るく
 昔や老ても 釣ふまねれに

羽

身 素 柳 逸 所 吟 月 杏 歳
 身 素 柳 逸 所 吟 月 杏 歳
 身 素 柳 逸 所 吟 月 杏 歳

昔や箱根も 老の裏をなく
 昔もや老ても 昔はなつ日

毛

本居来 牛の毛鞍に毛毳
 家に向ふやうに遠き毛の
 閑さのえて 昔踊る 毛古
 眼のまへ 毛虫のひの甘とも
 手合平 毛毳のしらに舟
 遠きうら 毛の毛古
 穠たて 毛の毛古
 毛の毛古 毛の毛古
 本居の毛古 毛の毛古

文 禮 芳 吟 吟 吟 吟 吟 吟 吟 吟
 禮 禮 禮 禮 禮 禮 禮 禮

代りきしむ本に甲斐のなまも毛虫は
這ゆして鳴きや夜毛虫の
殺すまし毛虫なりしとてこれ海
控にゆく毛虫に人のたけりしま
まも毛虫の刺をせしむる危
死より人代り好持ある毛虫は
生れたる本の毛虫も毛虫は
蝶と化す果のまはる毛虫は

灌佛

灌佛や響りあきる花の氣
紅丹うもを病てあひせぬ甘茶は
灌仏中待りしけは里より

一 露 菘 杏 梧 吳 芳 文
和 柳 窓 栖 言 緯 禮
山 松 風

佛とて乃かきき中産佛の
くかん佛や映る紅りのうも
男子に佛の産原まもりし
寺檀寺中子供相人の灌仏會
灌かとも夜よけれ葉際佛
帯より毛虫き曉や佛生層
灌うはや佛にかる人の露
茶も白ひ花も白く佛生層
よひ毛虫も不乾く佛うも

洗磨祭

かきき洗磨の洗磨祭の
是邊に洗磨の端より

東 松 杏 梧 梅 歷 菘 玉 芳
曉 虬 窓 栖 白 山 琴 桂 律
陰 風 雨 蘭

多病や半いし重き世の隔
昔朝や別れて暮るる夕
昔朝やもふ合ふ年も所て
多病や初しきもの六窓の月

甚羽織

露も重きし色も重き甚羽織
心も重きしやうそ甚羽織
船の舞も重き甚羽織
手合も重き甚羽織
着るも重き甚羽織
風呂も重き甚羽織
庄も重き甚羽織

吳 寸 芳 弄 為 向 一
音 方 露 山 峰 柔 兩 高

遠く人とも重き甚羽織
甚女ト懸懸目たつ羽織哉
行も重き人々も重き甚羽織
珊瑚珠の流も重き甚羽織
いらぬも重き甚羽織
甚羽織も重き甚羽織
さうと重き行義も重き甚羽織
美し重き透る羽織
濡毛の衣も重き甚羽織
着るも重き甚羽織
是れ人にも重き甚羽織
服も重き甚羽織

里 友 遠 清 梅 歷 嶽 苔 素 欲 岳
生 山 泉 白 山 琴 我 寺 竹 每 齋

川舟や舟をよらす 暮初哉
暮初哉 盡くもて 暮くもて
透通る 初の月也 暮初哉
従う初月場合もあらず 暮初哉

一夜酒

夜掃てり くらげくく 一夜酒
船人よ 宿者もれ くらげくく 一夜酒
葉もくく くらげくく 一夜酒
下もくく くらげくく 一夜酒
初の夜もくく くらげくく 一夜酒
暮もくく くらげくく 一夜酒
深き夜もくく くらげくく 一夜酒

月 月 連 柳 古 松 吟 芳 菊 寸 菱
洲 待 壺 山 号 風 緯 古 芳 菱

隣舟も 舟をよらす 一夜酒
初の月も 舟をよらす 一夜酒
深き夜も 舟をよらす 一夜酒
今も 舟をよらす 一夜酒
初の月も 舟をよらす 一夜酒

蚊き火

夜舟り 舟をよらす 蚊き火
初の月も 舟をよらす 蚊き火
深き夜も 舟をよらす 蚊き火
今も 舟をよらす 蚊き火
初の月も 舟をよらす 蚊き火

雙 近 寸 芳 文 月 為 聽 里 友 逸
松 山 芳 律 禮 初 勒 泉 山 山 水

馬廐へも好き入り配りて夕餼を
隣へもよそ利く極の好きか
好きくち好煙り原も小川を
ひら家にある好きく煙り
位位のとひりけり好き
子を撫育するも好きく好き
禁るも客に候りも好き
隣りうら夕暮つる好き
燈立に好きも好きく池の魚
行能くまきく好きく好き
禁るも月夜星も好き
灯もまきく好きの篇の夕好き

武彦

鯨 白 松 空 井 近 嶽 琴 歷 梅 如
秀 水 少 我 月 山 琴 芳 山 白 柳

好き中も佛壇の間も思ひ
姑のあゝも好き好きく好き
客らも好きく好きく好き
元車も好きく好きく好き
初も好きく好きく好き
裏田の夕暮つる好き
あゝ好きく好きく好き
好きく好きく好きく好き
好きく好きく好きく好き
好きく好きく好きく好き

水

好きく好きく好きく好き
好きく好きく好きく好き

肥前
肥後

一 素 魯 無 芭 杏 吳 芽 唯 月
和 柳 竹 石 醜 菜 意 色 律 新

上

夕膳を舟宿すまゝして暮の月
 魚釣てまゝうら咽し暮れ月
 轉ひ舞のふとこ遠くや暮の月
 暮の月窓のて掃て他舞らる
 川に流ふ所の流ひ暮の月
 舟道具の遺物拾て暮の月
 逢中から午うらゝお暮の月
 初見の腰うけ客やむの月
 多食のやし家せつも人あつと
 況名をゆつ何の嬉みや暮の月
 未と身にき雷や暮の月
 田中や人のゆさうる暮の月

色 水
 法 人
 素 子
 松 机
 吟 雨
 閑 美
 青 圃
 晴 月
 素 白
 蕨 琴
 尚 毛

宿箱の新もつと暮の月
 月新や益の果さるの嬉し

暮山

暮の山夜をぬれをたゆまらる
 暮れ山
 喜おれ山夜の歌うる暮の山
 項得たおらるる暮れ山
 門掃て眺ておらる暮れ山
 行人の望のこゝ暮の山
 分けぬれなきまきあり暮れ山
 鐘の声つたお月あり暮れ山
 暮れ山はくたやる暮れ山
 暮の山とてくちやけられらる

行旅

芳 文
 律 禮
 寺 元
 油 梅
 友 山
 杉 少
 三 少
 本 鳳
 昇 志
 告 憲
 芳 律

夏海

暮の海白く浮の川を
御おのり来るを
東の宮に本流れぬ海

目高

夕のつげいぬ流る目高
やうてても信る水に目高
水脚の船も似ぬ目高
溝川の目もせぬ目高
中絶お動いても目高
いそぐは流る目高
市へゆく船も目高

芳翁 吟
律 翁 待 泉 園 存 風
律 翁 待 泉 園 存 風

金魚

常あけぬ切戸通ぬ金魚
縫物に倦む眼着ぬ金魚
活きとり並んで金魚
眠らうる船くぬ金魚
皆存て其をもて金魚
箱庭の山も名ある金魚
よき水の通を金魚
水へてとるす金の金魚
名はもつ備へて金魚
名はもつ備へて金魚
名はもつ備へて金魚

芳士 眠 園 松 洪 一 吳 衆 聽 吟
律 行 翁 秀 圀 和 吉 年 泉 風

羽拔鳥

法きく 草花子 鈴より 羽抜鳥
人音に 向き 虫より 人音は ぬけ音
若鼻に 吹うれて 飛ぶや 羽抜鳥
言い 木に やり 飛ぶと ぬけ音
飛ぶと きくも ぬけ音 羽抜鳥
きくも 木に 飛ぶや 羽抜鳥
飛ぶと 木に 飛ぶや ぬけ音
羽の ぬけて きくも 飛ぶと 鶴音
は ぬけ音 きくも 飛ぶと 老も せきり 危
声も 傳ふ やせり やり 羽抜鳥
ぬけ 羽を 祝て 飛ぶと 新 雀

羽前

一雙 一閑 法吳 油琴 為梧 唯
鼎松 和美 泉寺 梅柱 勅風 風

羽の ぬけ音 飛ぶと ぬけ音 深山鳥
身 纏ひ 飛ぶと ぬけ音
殊多し 飛ぶと ぬけ音 鳥
きくも 木に 飛ぶと 羽抜鳥
きくも 木に 飛ぶと ぬけ音
ぬれた 木に 飛ぶと ぬけ音 羽抜鳥

早乙女

早乙女の 姿より 雨の 煙る中
初と 舟の 皆 早乙女より 夕
早乙女の 姿より 馬の上
早乙女に 虹より 早乙女に 河津屋
早乙女に 東海道を 百歩 歩くと

近山 素白 吳羊 芳柳 晴風 月影 向景 蓬殘 歲琴

早乙女に先づきりりり此本橋
早乙女ト一 罽られりりり淋から
早乙女や今も昔の唄のあ
早乙女や濡たつれを月小乾す
早乙女の小声に涙小夕う
並ねをかきしに休小梅甘うれ
早乙女や笠とれハ皆 知く歌

東京

夕晴や多きすりり 田の銭花
川道のをきち仕るや 田多取
春の世の海も 田多取
是より人取やりのあね田多取

田草取

如逸 梅 芳 文 眠 孤 玉 素 歷
楓 水 琴 白 律 禮 露 芳 桂 白 山

多きの強 小田の月
水も湯 田多取
よ日如 田多取
種とも 田草取
とり 田多取
上り下り 田多取
乳香子 田多取
き山のも 田多取
降る雨も 田多取
花嫁の 田多取
とて通る 田多取
先仕舞 田多取

羽後
里

眠 才 孤 素 蘭 本 楮 里 初 柳 松 魯
露 芳 芳 泉 雨 風 風 山 卜 垂 札 石

夕顔を採くはくはくは田舎

夕顔

夕顔や 乳房のくまの畑も
夕顔や 家内多分の家内
中つゆの棚の下ゆく 箕の車
夕顔や 木のくまの畑も
夕顔や 圃のくまの畑も
夕顔や 糠に汚れゆく 牛の乳
中つゆのくまの畑も 起る
夕顔に 豆腐のくまの畑も 戸口
夕顔や 庭の日脚に 咲く
中つゆのくまの畑も 咲く

芳 吟 青 淇 吳 左 友 清 淇 吟 芳
柳 雨 圃 園 香 山 美 山 風 律

夕顔の下 衣たのむ 命の香
夕顔の 家内 濁る 心
中つゆの 家内 拾ひ 物の味
夕顔や 敷咲く 中つゆ 実の味

蓮

蓮のや 葉肉の 色も 心も
葉肉を 補ひゆく 蓮の心
照りみる 日よ 香の 蓮の心
明星の 光り 蓮の心
旭の 香の 蓮の心
不意の 夜を 蓮の心

武 秀 松 葉 文 芳 尚 全 可
羽 及 翠 雨 承 嘯 少 扇 禮 律 中 芳
向 全 翠 雨 承 嘯 少 扇 禮 律 中 芳

伸る楊をさうす流や石あやめ
石菖や子水きくくく心く脚急
石菖と舞つてきかき草 盆
石菖は仕上けの井紡かきり
石菖や水ききけ舞ゆき産む
石菖の形新うれくくく

楊子

楊子や裾着てゆく人の身ふ
楊子も飾りのうちよ人形店
なぐくくく心くくくく扇の面
撫子や馬の上くくく眼はまる
楊子や吟聲あふる花の色

琴 恋 尚 才 左 芳 吟 斎 一 向 聽
芳 露 色 芳 律 風 峰 鳥 菜 泉

楊子や野風橋くく柳もあふる
之果もき野子楊子の盛りうさ
楊子やかきき節に楊らき
なぐくく心くくくく花の色
楊子や鈴くく又の水配り
撫子や舟場く通ふ砂河系
あぐくく心くくくくくくく

けの心

眼もくくく人の盛りやけくく心
多物の岸を遠くやけくく花
程ゆくくく心くくくくく心
是程くくく心くくくく心

友 梧 以 吟 芳 連 松 蓬 長 友 貞
山 風 存 風 律 圮 穢 穢 山 庚

謹

謹

月さすや右衛門のどろおはる花
 今りりして月もさすはる花
 美しきさすはる花
 あり親の眺るものくはる花
 琴丸を落しはる花
 しかるはる花
 着飾るも都の眺るはる花
 世の何にあはるはる花
 着せる子に笑ひはる花
 けうけうはる花
 せうけうはる花

富士詣

身寸晴三士吳俱共
 香芳月歩行雪園
 文芳多藝俱共
 禮律圃彗園雪

遠られぬ重し何んは
 生還の心し上もや不二詣
 健人くはるはる
 富士詣連の重し掛ひりり
 手掛り深しを重し不二詣
 一日も遊す日さす
 世の果は届く借うれ
 明きしし眺るものくはる花
 美しきさすはる花
 あり親の眺るものくはる花
 琴丸を落しはる花
 しかるはる花
 着飾るも都の眺るはる花
 世の何にあはるはる花
 着せる子に笑ひはる花
 けうけうはる花
 せうけうはる花

吟風 蘭西 聽泉 永嘯 松圮 歷山 嵯琴 俱園 半憲 鳳考 文禮 芳律

體

座頭納涼

柱をくぐりて座所の納涼の事
目もゆる人き知か〜納涼連
梅をき探さず涼む座所かな
他の人も入れぬ座所の納涼が
納涼も力居りぬある座頭可奈
人きや座所の納涼とやうとて
琵琶をり耳すまきす座所の事
皆笑顔〜涼み居る座頭を
檝楫類物も座所の納涼かな
乃らぬ灯を〜坐す座所の事
月の影を座所の事と納涼が

上七

武藏

羽後

芳吟聽真真雲拈笑玉編
律風泉哉松峰華山我桂園

夏神樂

本綿四子に紅屋〜月や 夏神樂
焔壳のやうな鳥帽子や 夏神樂
松の声猶〜てや〜ぬ 夏神樂
水に引く灯籠もほ〜 夏神樂
松の影今浪の鼓も 夏神樂
鈴傳めなく〜玉傳〜 夏神樂
狸衣の水也す〜 夏神樂
川や〜新道〜 夏神樂
術の音も流し笛の音も 夏神樂
川流も夏もわ〜 夏神樂
船〜〜〜 夏神樂

豊前

英可恭柳杏牛淇以美真栞
仙山奇絲窓舎園孝柳哉鞆

暮神樂あつても音のりき
夕影まほしくぬ人の中暮神樂
吾神樂更く神の常くも

船遊び

歌くも連て是舞や船遊び
月の心を皆待たずし船遊び
余何れ灯をかき人舟の遊び
風筋の流し遊み小舟か
漕もせて二艘一舟も船遊び
浅い人も浴衣のまや船遊び
奢りも六流れ船遊び船遊び
船うや料理せぬ子の船遊び

一山
寸芳
律
唯
以
梅
杏
吳
雙
歲
琴

月まほしく房も忘はるし船遊び
舟の中も遊び船遊び
其あも遊び船遊び桂川
杉り月かきも遊び船遊び

繡

面も中繡もぬらすも膝は
繡おろさくやこの床宿あめ
繡の影もやむらも物も魚
月影もぬる筈鳥あり繡の中
繡おろさくも鴨遊む夕も
繡おろさくもあもゆも芽か
繡の柄も素更もや音の月

士
無
寸
芳
吟
為
一
東
吾
吳
玉
行
觀
芳
律
風
勅
鳥
曉
岳
年
蕉

縹ひしきさかき 縹巾 毎々日
縹細巾 裏着のききひしき
縹おきき音聞たりや 水の毛
縹拵てはあや 鯉の遊 あり
袴川も日の欄 糸 縹の刺
濡るおれ縹掛くあり 海士も
縹くくあるや 小家の四つ目
縹道の舟にたあや 子長 緞
重き縹おくは 娘 けりもくけ
縹重し 月もあたり 松の氣

振舞水

あつち振舞水 水もあつち

一 芳 菊 雲 井 雙 全 一 芳
琴 律 友 峰 舍 松 和 秀

倒かき 振舞水 水もあつち
よい解やうき 水もあつち
桐杉井を振舞水 水もあつち
家の名を振舞水 水もあつち
宵はあや 振舞水 水もあつち
四つ目 振舞水 水もあつち
雲もあつち 振舞水 水もあつち
人語すあつち 振舞水 水もあつち
柳 振舞水 水もあつち
松子 振舞水 水もあつち
振舞水 水もあつち
濡るあつち 振舞水 水もあつち
都をれ 振舞水 水もあつち

東京

晴 日 一 芳 菊 雲 井 雙 全 一 芳
琴 律 友 峰 舍 松 和 秀

葛水

葛水巾返りの香くするの地をう
くすくす巾橋の往來を夕眺め
葛水巾心の念——客主
為らきくく先葛水の地をうれ
葛水に養ふ旅の芳れ切事
くすくす巾蓋碗くくくす巾の
初所の多く葛水くすくす巾
葛水巾枕巻——き度家な
葛水巾又脱くま巾入る肌
葛水巾程くく巾の来る空敷
くすくす巾香くくく巾水邊

東京

笑山 新琴 蓬月 連山 洪山 吳山 岳山 才山 約山 泊山

定まり巾葛水巾すくす巾の氣
葛水巾香く味の升もけら

煮梅

煮名名に巾——里巾煮梅巾
方丈の茶を煮く巾煮梅巾
月の煎巾連を煮く巾煮梅巾
番巾煮梅巾煮梅巾煮梅巾
煮くく巾里巾居く煮梅巾
煮の香巾又巾煮梅巾

東京

巾の皮煮る巾雷のやん巾巾
煮巾雨巾巾巾巾巾巾巾巾

巾の皮脱

蘭

芳文 梅拓 芳梅 芳梅 芳梅 芳梅 芳梅 芳梅 芳梅 芳梅

皮脱——巾に美——旭 新
 竹の皮脱く音はくく日和風
 裏田をばくく巾の皮脱く
 取らるる風くく巾の皮
 日の照る巾編ん竹の皮
 脱かるとく巾に善く竹の皮
 脱くく知多味く巾の皮
 美く今皮脱——竹の肌
 雨に多ていと巾の皮
 脱かるとく巾の皮
 風もくく為かき巾の皮
 知脱の日に脱く巾竹の皮

東京
 一聽泉
 梅白
 琴芳
 蓆扇
 恭寄
 拈華
 笑山
 吳雪
 約岩
 破笑

穿く人に流れと巾の皮
 巾の皮脱く音はくく筆の皮
 竹の皮くく巾の皮
 立つ多にかきく巾の皮
 校皮も着る巾の皮
 面巾皆脱かると巾の皮

白松人
 貞才
 菴芳
 文禮
 芳律

修る音はくく柳か
 小田古ひくく巾の皮
 人心入るくく廣く
 人入るくく廣く

伊勢
 耕芳
 律雨律

藪

皇姑の中へ登りしわらんち
 未く月夜昇らぬうち新きて
 町へ町のまきむれるなり
 松阪の姑を京より物暑し
 元服 袷い 何子 仕る 彦く
 以 廿八嫁のやまぢの小あひ
 眠 彦ききき には紫蘇湯ふけく
 六冬に風雨と甚盤たこ盆
 山の上よりこれふとめ 湖
 堂より物暑く 又れ 旅は目
 厨子をしらけ海老籠籠り
 多後くらうち 柚味噌の煮籠れ

雨 律 雨 律 雨 律 雨 律 雨 律 雨 律 雨 律

注文もせぬ 榊本 指こむ
 明ききき 花の都のひかき
 雛の抱ひとり 新島もまし
 姐を洗ふ水も信ねるらん
 庭あ戸もれ候 李の船着
 高人の風俗もも遠く五七人
 流をなないり 彦 瘦馬に鞭
 不割からん 彦 年の坂
 善着の 彦 彦とつれぬ
 のころ酒枕おもたあけ 彦
 古い 馴 彦 大津繪の鬼
 枕 針も何と 彦 彦

雨 律 雨 律 雨 律 雨 律 左 雨 律 雨

龍

橋も二り四りかゝる閑き地
 月もよそ仕送り魚の影らしく
 浴衣も冷も知らぬ湯上り
 子細にわらひ付たる 踊笠
 多き肉なら怪我を多し
 日よそいぬより遠い町にあり
 生草もよそいぬのいぬのかよし
 伝のせまのよそいぬのかよし
 土もよそいぬのかよし 畑

律 兩 律 兩 律 兩 律 兩 律

子にも傳も笠着せて也。田植られ

信濃

芳逸

伊豫簾古き新端より掛茶を
 旅向らもよそいぬのかよし
 子作りの草も月よの料理煙
 西も東後ゆかかなる秋
 花入のありてよそいぬのかよし
 又吹着付膝の焼 焦
 世細なる子に囀れ輪をうけて
 思らぬ筆にそよよなるみ
 真心をうらやむ境の流もよし

水 律 水 律 水 律 水 律 水 律 水

やつと空を遊べ 叅官
 夕月の光を照らす 神路山
 舟すゝ木兔の眼は せせ
 心も昔氣質と 鳴られ
 新仇とせぬ 藤のかぶつ
 是ならぬ 聖旨も 法念も 花日和
 接し 榊木の 芽ふも
 三
 懐く身つらぬらん ちり
 遠く川舟り 是と習らす 兒
 兎角しと 懐に 條。 菓子紅
 穢ふと 茶屋の 運命
 平内も ぬく 年か ちり

律水 律水 全律水 律水 律水 律水

二
 あれよ 是より 編か 長ひ
 澤山に ありて 由 鍵ハ 合と ぬの
 古い 桐の 虫も 通さぬ
 今も 昔も 音も 所の 名も
 昔も 今も 舞も 杖の 供養
 うれ 六待 宵月の 山も なれ
 ひも 芝も 吹
 二
 笛を 屏風の 病も ぬき
 茶を 都くも 老の 慰み
 小村と 六つと 貧しき 家も
 穢れ 馬も 馳走 仕て せれ
 咲花 機嫌 上戸の ちり

律水 律水 律水 律水 律水 律水

二

抄りしりかき書

[Faint handwritten text in a rectangular frame]

水

